

てら さき やす ひろ
寺 崎 保 広

学 位 の 種 類	博 士(文 学)
学 位 記 番 号	文 第 241 号
学位授与年月日	平成19年10月11日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最 終 学 歴	昭和58年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程退学
学 位 論 文 題 目	古代日本の都城と木簡
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 今 泉 隆 雄 教 授 大 藤 修 教 授 阿子島 香

論 文 内 容 の 要 旨

日本古代史の研究課題の一つとして、歴史時代の発掘調査成果に対して、日本史学、あるいは文献史学の立場から、これをどのように受け止めて、どのように日本史の問題として活かすべきか、ということがあげられる。

近年における発掘調査の進展は目覚ましく、次々と新しい知見が示されている。それらを学問的に的確に位置づけることは容易ではないが、歴史考古学に最も近い研究分野である日本古代史の研究者は、常にその努力を続けていかななくてはならない。特に、都城の発掘は、考古学・文献史学・建築史学などの諸分野にわたる学際的な課題であり、また、発掘調査で出土する木簡は、考古資料であるとともに、貴重な文字資料であるから、日本史の史料としての分析が不可欠な課題である。

本書は、約20年の間に、都城の発掘調査に従事しながら考察し発表してきた論考をまとめて一書にしたものである。全体を二編に分けて配置した。第一編では、発掘調査成果にもとづき、古代都城の諸問題について考察したものをまとめ、第二編では、都城などから出土した木簡に関わる論考によって構成した。

第一編 古代都城と平城宮

第一章 古代都市論

本章では、飛鳥からはじまり、藤原京・平城京をへて長岡京・平安京にいたる古代の首都についての問題を、いくつか取り上げて考察した。

特にここでは、都城史の中での藤原京の画期を強調し、それを「都市」という概念でとらえて良いのではないかと主張した。かつては、マルクスやウェーバーの定義に依拠することによって、日本古代には「都市」は存在しなかったとする学説が優位を占めていた。しかし私は、官僚をはじめとする非農業民のまとまった定住区域としての京城の設定をもって「都市の成立」と考え、初めて京城をもつ都である藤原京こそが我が国で最初の都市であると考えた。本章のもとになった旧稿の発表後、日本における都市の成立を巡って、いくつかの議論が交わされるようになったように思う。

もう一つの論点は、平城京を素材として、様々な側面から、都市としての成熟度を探ろうとしたことにあった。具体的には、平城京の人口、平城京住民の居住のあり方・本貫地との関係、平城京内で発掘された工房の性格などである。そのうち、工房については、古代国家の「官営工房」論といった点で、いまなお議論の対象となっている。

結論としては、平城京の70年余の間に、古代都市は次第に成熟していったのであり、奈良時代末にもなると、米を買って生活する都市住民が登場し、環境汚染といった都市問題も生じるようになっていたことを指摘した。

第二章 平城宮大極殿の検討

平城宮が他の諸宮と大きく異なる点として、中枢部分が二カ所に存在することがあげられる。つまり、天皇が内裏から出御して、臣下と相対する場としての「朝堂院」が、朱雀門の北の地区(中央区)と、その東の壬生門の北の地区(東区)にある。二つの地区の併存の意味や、両者の機能といった諸点については、今泉隆雄氏をはじめとする先学の研究がいくつか示されている。

本章では、そのうちの東区大極殿を検討対象とし、発掘調査の成果をふまえて、主に文献学的検討を行ない、また、大極殿前庭で検出された宝幢跡などの儀式関連遺構などについても言及した。

ここで、議論となるのは、東区大極殿の上下二層にわたって検出された殿舎の建替の年代、その下層遺構の名称、宝幢遺構の解釈などであろう。それぞれの結論のみを示すと、東区大極殿の建替の年代は、聖武天皇即位の720年代ではなく、平城京還都後の750年前後と見るべきこと、大極殿下層遺構の名称は「大極殿」ではなく「大安殿」の可能性が高いこと、大極殿前庭で発見された宝幢の跡は遺構の重複関係では最も新しく、桓武天皇の即位式に伴う施設と見るべきこと、等を述べた。

平城宮の中枢部を巡っては、確実な材料が乏しいために、研究者によって様々な解釈がなされ、奈文研の報告書間でも異なる見解が示されることも多く、未解決の点がまだまだ多い。私がここで述べた諸点についても、有力な仮説であると考えるが、客観的に言えば鉄案とは言い難く、異論も出されるであろう。それらについては、平城宮のみならず、他の都城を含めた全体的な変遷の中で検討してゆくべき課題であると認識している。

付一 平城宮大極殿

1983年に実施された平城宮第152・153次調査の成果をまとめ、紹介したものである。

この中で、東区大極殿の下層で検出された建物遺構の名称として「大安殿」にあててはどうか、という推定を下した。史料に見える「大安殿」については、大極殿と同一かどうかをめくって長い間の議論があるが、平城宮の前期において、中央区の大極殿と併存する東区の大極殿下層遺構をこれに充てると、いくつかの疑問点が解消するのである。

この「大安殿」説については、第二章の中でも論及したように、その後賛否両論が示されている。「大安殿」説にも弱点があることは認めるが、これを否定した場合に、それに代わるべき殿舎名が不明なまま

では、「大極殿代としての大安殿」という福山敏男説を援用した私説も、なお成立の余地があると考えている。

付二 平城宮における大嘗宮と西宮についての覚書

1980年代末に、平城宮東区朝堂院の朝庭部分において、複数の時期にわたる大嘗宮跡が検出された。それらは三時期とも、五時期とも言われ、それぞれどの天皇の大嘗祭にあてるのか、が議論されてきた。ところが、最近実施された中央区朝堂院の朝庭における発掘によって、かなり明確な結論がでてきたように思われる。

本節では、大嘗宮の問題、および平城宮の中枢部を指す用語としての「中宮」「西宮」をめぐる従来の議論を簡単に紹介した上で考察を加え、大嘗宮・中宮・西宮の比定について、基本的に『平城宮発掘調査報告XIV』の見解が裏付けられたであろうことを述べた。

すなわち、中央区朝堂院の朝庭で一時期のみの大嘗宮跡が検出されたことにより、東区朝庭の大嘗宮跡が五時期と確定し、奈良時代の全ての天皇の大嘗宮の場所が明らかとなった。しかも中央区のそれが称徳天皇の大嘗宮であることから、称徳ゆかりの「西宮」を中央区にあてて考えるべきことが極めて有力になったのである。

第三章 朝堂院と朝政に関する覚書

本章は、平城宮東区朝堂院の東第二堂の発掘に従事し、その過程で気付いた朝堂の第一堂と第二堂との相違という点を、橋本義則氏の見解などを参考にしながら考えたものである。

朝堂の構造の変化が、そこで行なわれる朝政の変化とパラレルなのではないか、という発想のもとに、各都城における朝堂の殿舎の比較検討を試みたものである。それによれば、朝堂の第一堂を第二堂以下とは異なる構造とし、いわば第一堂が突出していた古い段階から、第二堂以下と同じ構造になる新しい段階へという変化が明かとなった。そして、それは、第一堂で行われた大臣・議政官と諸司・弁官とのやりとりという朝政の実質がしだいに失われ、形骸化したために、第一堂の特殊性を解消することとなったのではないかと考えた。

第四章 式部曹司庁の成立

本章は、平城宮の官衙について考えた論考で、官衙の一例として、発掘調査によって遺構がある程度判明しており、木簡等も出土している式部省をとりあげた。

調査成果によると、その官衙の様相が奈良時代前半と後半とで大きく異なり、奈良時代後半になると、式部省の西半部が掘立柱建物から礎石建物となり、規則的な配置をとるように変化したことが明かとなった。その点に着目し、その意味を考えてみた。そして、本来実務の場であった曹司の一部がしだいに儀式的の場ともなっていくのではないかと結論づけた。

つまり、奈良時代後半になると、儀式的の場としての「朝堂」、曹司の中における儀式的の場である「曹司庁」、それと実務を行なう「曹司」と三区分別できるようになるのではないかと、という仮説を提示した。それが式部省や兵部省などに限られるのか、他の省にも及ぼして考えられるのかなど、これからの発掘調査の進展とともに、なお考えなければならない課題は多い。

第三章と第四章に関わることであるが、宮における朝堂と曹司との関係については、再検討すべき時期にきているように思う。本来朝堂で行なわれた政務が、曹司の成立とともにそちらへ移り、それに伴って朝堂が儀式的の場に変化していった、という岸俊男説がこれまでは通説的位置にあったが、曹司の成立

が前期難波宮まで遡るという発掘の成果によって、朝堂よりも後発ではない可能性が高まった。それを受けて、吉川真司氏は、朝堂と曹司の機能が本来別だったのではないかというきわめて刺激的な説を述べられており、今後もそうした点の検討を続けてゆきたいと考えている。

第二編 木簡と飛鳥池遺跡

第一章 考課・選叙と木簡

本章は、奈良国立文化財研究所の報告書『平城宮木簡四』（1986年3月）に執筆した文章をもとにしている。同書は、1966年に平城宮東南隅で実施された第32次補足調査で出土した木簡についての正報告の第一冊目で、大量の考選関係木簡が対象となる。

そこで、従来の研究を踏まえながら、考課と選叙の具体的な方法を、令の条文や平安時代の儀式書などから復元し、そうした考課・選叙のどういう場面で木簡が使用されたのかを明らかにした。したがって、本章の特徴は、考課と選叙に関連する木簡の類型を示したことと、考課・選叙の儀式のあり方を復原したことにあると考える。

従来、考課木簡の類型が乏しく、限られた範囲内で、考選木簡の使用を推定してきたが、文献史料によれば、考選儀の中の様々な段階・場面で木簡が使用されていた可能性を考えるべきであろう。

なお、第32次補足調査出土木簡の正報告は、『平城宮木簡六』（2004年3月）で完結した。収録されたデータは増大したが、考選木簡についての基本的な考えに変更の必要は特になく、と考えている。

第二章 考課木簡の再検討

本章は前章と密接に関わるが、重点を置いたのは、奈良時代における考選制度の変化ということである。

前記の第32次補足調査の木簡とともに、新たに第155次調査で出土した木簡を併せて考えると、同じく式部省関係の考課木簡といっても、出土地点によって、奈良時代前期と後期という木簡の年代の違いを弁別しうることになった。その時期差による木簡の内容・種類の違いを手がかりとして、考選制度についての通説である野村忠夫氏の説に対して、一部修正すべきことを主張した。

すなわち、日本古代における考選制度はきわめて詳細なものであるが、実際の適用にあたってはかなり機械的になされ、実質的な評価を下されることは少なかったのではないか、というのが野村説の大意である。しかし、それは奈良時代後期以降について当てはまるのであって、奈良時代中頃までは、令の規定通りに実質的な適用が目指され、また実施されていたことを、木簡から明らかにした。同様のことは、考選制度のみならず、律令制度の他の分野にもあてはまることかも知れないと考えている。

なお、本章の結論は、第一編第四章とも密接に関連する。

第三章 木簡論の展望

ここでは、木簡研究史の中で重要な位置を占める横田拓実・今泉隆雄両氏の論文を取りあげ、横田論文を材料として文書木簡について、今泉論文を検討しながら荷札木簡について、その機能という点を中心に検討した。

文書木簡について、横田説の分類方法の問題点を指摘し、木簡の機能をより説明しうる分類法を探るべきことを述べ、長屋王家木簡・二条大路木簡などを材料に試案を示した。

また、荷札木簡については、今泉説のうち、荷札作成段階として郡衙の役割が大きい点は認められるものの、それを強調しすぎるのは危険であること、伊豆国の例を見ると、「郡」より前に「郷」の段階で荷札木簡が作成されたものもあること、さらに「国」作成の荷札木簡も併せて考えると、荷札木簡の基本的な機能として、国司の勘検を重視する今泉説は疑問であること、などを指摘した。

付一 最近出土した平城京の荷札木簡

第三章の荷札木簡論の前提となる個別分析にあたる。

二条大路木簡の伊豆国の荷札を材料として検討した結果、同国の荷札は最初に郷の段階で作成され、それが郡において確認の上、木簡に追記がなされたことをのべ、今泉氏の荷札木簡郡段階作成説に一部疑問を呈したものである。その後、郷を重視する見解として、山中章氏も木簡の作成技法をもとに展開されており、この分野での議論が活発化したが、その一つのきっかけとなった覚書である。

伊豆国の荷札の分析は正しいものと考えてるが、問題はそれを他の国の荷札に及ぼして良いかどうかであろう。今後のデータの蓄積が待たれるところである。

付二 平城京「二条大路木簡」の年代

「二条大路木簡」と総称しているうちの南の溝と北の溝から出土した木簡には、共通点が多いものの、廃絶時期は若干異なるであろうことを、データをもとに指摘した。

すなわち、北の溝は、天平10年初頭には埋められたのに対して、南の溝は天平12年の頃まで存続していたであろうことである。溝廃絶の契機としては、北の溝については、その北に邸宅を構えた藤原麻呂の死去、南の溝については、聖武天皇による恭仁遷都にともなう平城廃都、といったことが推定できる。

得られた結論はそれだけであるが、二条大路木簡を考えるにあたっての基礎となる点だと考えている。

第四章 長屋王家木簡の諸相

本章には、長屋王家木簡に関して執筆した諸論考をおさめた。長屋王家木簡の全体像については、別に拙著『長屋王』（人物叢書、吉川弘文館、1999年2月）の中で述べたが、ここに収めたのは、その前提となる個別の小論である。

□ 長屋王家の文書木簡

長屋王家木簡を発掘している最中に執筆したもので、長屋王家木簡の中の文書木簡を、差出と充所を中心に分析することによって、発掘地の性格を考えたもの。

特に、木簡群を検討すると、二種類の家政機関が登場すること、それらは、三位相当の機関と二品相当の機関であることを明らかにした。そして大量の木簡群を保管していた当該地の家政機関は、三位に相当する方であり、当時の長屋王の身分に該当することから、「長屋王家令所」の名称にふさわしいことを述べた。もう一つの二品相当の家政機関は、「長屋王家令所」に対していくつかの指示を与えている木簡が多いことから、これを夫人の吉備内親王の家政機関ではないか、と推定した。

なお、この二品相当の家政機関の本主については、当時三品の吉備内親王が、なぜそうした組織を保持しえたのか、という問題が残ри、もう一つの可能性として、亡き高市皇子の機関を長屋王が相続したのではないか、という説が提示されている。

□ 「若翁」木簡小考

長屋王家木簡の中に、当初は全く意味のわからない「若翁」という語句を記述するものがあつた。その後、東野治之氏がこれを王族の子供たちに付けられた敬称であろうという見解を示した。それをうけて、

これ裏付けるデータを提示し、さらに長屋王家木簡に登場する「若翁」は皆、長屋王の子供であろうこと、彼らが成長後に同じ名前の某王・某女王と名乗ったとすると、これまで知られていなかった長屋王の子女が何名か新たに判明すること、を指摘した。そのように解釈することによって、天平9年10月20日に破格の叙位をうけた五名が全て長屋王の子女であったことになるが、その理由は、長屋王を無実の罪に追い込んだ藤原不比等の四子がこの年に相次いで亡くなったことが、長屋王の祟りと考えられ、その罪滅ばしという意味をもつ叙位ではないか、と推定した。

三 長屋王家木簡郡名考証二題

長屋王家木簡の中で、郡名が不明であった二点を取りあげ、「策覃郡」は武蔵国「埼玉郡」、「志婆郡」は播磨国「宍粟郡」であろうことを考証した。そして、そう読むことによって、前者からは、古代の駅路である東山道のルートと駅の所在地の問題に一つの仮説が提示できること。後者からは、長屋王家の所有する食封の所在地、あるいは食封からの税の徴収方法の問題につながることを、などを指摘した。

四 長屋王家木簡にみえる小子と帳内

長屋王家に仕える下級官人として「帳内」や「小子」といった名称が見えるが、従来この二つは同一の地位を示す呼称だと考えられてきた。しかし、関係木簡を比較検討すると、明確な違いが認められる。「帳内」は官人身分のトネリであり、一方「小子」はそうではなく、文字通り年少者として雑役に従う者たちであり、両者は区別すべきこと、を述べた。そうだとすれば、古代における「小子」といった少年の労働力といった新たな観点も今後、課題となつてこよう。

第五章 帳簿論

長屋王家木簡の中で、点数の上から見て中心となるのは、邸宅内の米を保管する部署で、日々支給した事柄を一点ごとの木簡に書き付けた米支給伝票の木簡である。平城宮を始めとする宮跡から出土したものには、こうした類型の木簡が少なかったこともあって、「伝票」やそれを集計した「帳簿」木簡についての本格的な分析が少なかった。そこで、ここでは、古文書学史における「帳簿」の位置づけを検討しながら、あらためて「帳簿とは何か」を考え、その上で、木簡の「帳簿」と「伝票」について、検討を加えた。

従来の古文書学では、広義の「文書」は、狭義の「文書」と「記録」に大別され、「帳簿」はこの中に埋没して、取り上げられることがほとんど無かった。それに対して、佐藤進一氏以後になって、ようやく「帳簿」に注目する論考が発表されるようになってきた。そうした近年の研究に学びながら、「帳簿」のもつ「照合機能」という点に着目して、木簡の位置づけを試みた。

今後は、帳簿のみならず、木簡全体に及ぼして、古文書学の中でも考えてゆく必要を感じている。

第六章 飛鳥池遺跡とその木簡

奈良県明日香村で発見された七世紀後半の遺跡、飛鳥池遺跡の概要とそこから出土した木簡を紹介したものの。

飛鳥池遺跡は、発掘調査区のはば中央付近で検出した堀によって南北二区に大別され、両区は遺構の様相が大きく異なる。南区は、大規模かつ多種多様な製品を製作した工房の跡であり、300基以上の炉跡を検出するとともに、そこから廃棄された大量の遺物から、工房での製品として、金・銀・銅・鉄・玉類・漆などであったことが判明した。その中には「富本銭」という銅銭も含まれており、そのことは工房の性格を大きく規定するものである。

一方、北区には炉は及ばず、工房ではない。むしろ、そこから出土した木簡の内容から見て、飛鳥寺もしくは、飛鳥寺東南禅院に関連する施設であったと推定できる。木簡は、七世紀後半の時期のものが大

量に出土し、当該期の貴重な史料となった。個別の木簡についての詳細は省略するが、天武朝と見られる「天皇」号を記した木簡、漢字の読みを示した「字書」の木簡、七世紀の大和の寺院名を列挙した木簡など、内容的にも検討を要する重要なものが多く含まれている。ここでは、木簡の示す事例の一つとして、地方行政機構の時期変遷について、木簡によって明らかになる点を略述した。

付一 富本銭の発見

富本銭は、1985年に平城京跡の奈良時代の井戸から出土した。当初は、流通貨幣である和同開珎と並行して使用された「まじない用の銭」厭勝銭と考えられた。ところが、その後、藤原京からの出土例が散見するようになり、特に、飛鳥池遺跡から大量に出土したことによって、その始まりが和同開珎より遡ることが確実となった。

そこで、本節では、富本銭をめぐるこれまでの議論を整理・検討することによって、同銭が厭勝銭ではなく、七世紀末に流通貨幣として発行されたと考えて良い、ということ述べた。

付二 飛鳥池遺跡の性格についての覚書

第六章で述べたように、私は、飛鳥池遺跡の工房について、七世紀後半の時期に国家によって営まれた大規模な工房であると考えたが、これに対して、吉川真司氏より批判が出された。すなわち、工房は「造飛鳥寺司」なる一つの官に所属するものであり、「官営工房」といった性格をもつものではないこと、富本銭をここで鑄造したということが必ずしも国家の工房であることを意味しない、という議論である。

ここでは、そうした新説に対して、それを批判的に検討するという形で考えをまとめた。すなわち、これほどの大規模な工房を、飛鳥寺という一寺院の修造のためにおかれた、とみることはできず、より大きな供給先を想定すべきであること、富本銭という我が国初の本格的な銭貨を鑄造するにあたって、国家直属の工房ではなく、寺院の工房に「委託」して作らせた、という説明は成立が困難であること、などであり、結論としては、旧説を改める必要はないことを述べた。

論文審査結果の要旨

本論文は、考古学の発掘調査の成果をふまえて、文献史学の立場から日本古代の都城と木簡について明らかにしようとしたものである。全体を2編に分け、第1編「古代都城と平城宮」は平城宮を中心に都城について、第2編「木簡と飛鳥池遺跡」は木簡について考察する。

第1編第1章「古代都市論」では、都市論の観点から古代都城を取りあげ、日本の古代都市は官人の集住区域である京域が設定された藤原京(694-710年)で成立し、次の平城京(710-784年)は時とともに都市として成熟することを明らかにする。

第2章「平城宮大極殿の検討」と2つの付章では、平城宮の2つの中枢区をめぐり、東区の下層遺構の正殿の呼称は大安殿であり、大極殿前庭で検出された宝幢跡は桓武天皇の即位儀に伴う施設であること、また2つの朝堂院朝庭で検出した天皇の即位のための6時期の大嘗宮跡から、中宮・西宮の所在を明らかにする。

第3章「朝堂院と朝政に関する覚書」では、朝堂院の東第1堂の構造の変化が、第1堂で行う朝政の形態化のためであることを明らかにする。

第4章「式部曹司庁の成立」では、平城宮式部省跡の発掘成果によって、奈良時代後期に式部省では考

第2編第1章「考課・選叙と木簡」、第2章「考課木簡の再検討」では、平城宮式部省跡出土の考課・選叙木簡を取り上げ、第1章ではそれらの木簡が考課・選叙の事務・儀式のどのような場面で使われたかを明らかにし、第2章ではそれらの木簡によって、考課制度が奈良時代前期には厳密に適用され実質的な意味をもったが、後期には形式化することを明らかにする。

第4章「長屋王家木簡の諸相」では、平城京の長屋王の邸宅跡から出土した4万点に及ぶ長屋王家木簡について、その文書木簡の検討からその出土地が家令所とよばれる家政機関であることを示し、またこの木簡群の中の「若翁」、「策覃郡」、「志婆郡」の郡名、「小子」と「帳内」について考証する。

第6章「飛鳥池遺跡とその木簡」と2つの付章では、飛鳥京に所在する7世紀後半の飛鳥池遺跡の性格について、出土木簡の検討によって北半分が北西に接する飛鳥寺に関連する施設、南半分が金・銀・銅・鉄・玉・漆などに関する官営の工房であることを明らかにし、さらにこの遺跡から出土した富本銭が日本最古の流通貨幣であることを指摘する。都城と木簡の研究は、考古学と文献史学との学際的な研究分野であるが、本論文は考古学の発掘調査の成果を十分に受けとめ、文献史学の方法によって研究を進め、都城については、都市論の観点から考察し、平城宮の中枢部の大極殿・朝堂、式部省などの中央官衙について明らかにし、木簡については、文書木簡、帳簿木簡、荷札木簡、また考課・選叙木簡などの史料学的研究を深め、さらに飛鳥池遺跡と長屋王家木簡という重要な2つの木簡群を解明し、都城と木簡の研究を飛躍的に高め、斯学の学術的發展に寄与するところ大なるものがある。